

近代社会のなかで、権力は現実的で、じゅうぶん明確な概念にみえる。近代国家のさまざまな機関は、権力を担うべく構成されている。権力がどのようなものであるかを、ふつうに近代社会で生活する人びとはみな知っている。

社会(科)学者たちは、こうした知識を前提にして、権力を考えようとしてきた。しかし、こうした知識は、西欧文明社会の「原住民の知識 local knowledge」にすぎないかもしれない。近代とは違った社会を営む人びとは、われわれの知るような権力の観念をもっていないのではないかと、考えてみたほうがよい。

M・フーコー以後、権力の謎は、広く意識されるようになった。フーコーは、権力の概念が育まれるにいたる西欧的文脈を問題とした。そして、権力を権力たらしめている視えない力こそ、ほんとうの権力であると示唆した。彼によれば、あらゆる言説や制度がこの意味での権力に浸透されている。社会(科)学は、権力

権力は、多く論じられてきたけれども、謎に満ちた現象である。

* 近代社会のなかで、権力は現実的で、じゅうぶん明確な概念にみえる。近代国家のさまざまな機関は、権力を担うべく構成されている。権力がどのようなものであるかを、ふつうに近代社会で生活する人びとはみな知っている。

*

権力は、多く論じられてきたけれども、謎に満ちた現象である。

権力の可能条件

橋爪大三郎

制度の生成3



橋爪大三郎
『言語ゲームと社会理論』
勁草書房・1985年

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中でのみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない、むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はグイト

ゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を採用することで、法と権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

社会の発見3



マックス・ヴェーバー
『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
大塚久雄訳・岩波文庫・1991年

禁欲的プロテスタンティズムにおける「世俗内禁欲」の倫理とベンジャミン・フランクリンにその典型をみる「資本主義の精神」。本書は、この二つの間の「選択的親和性」を主題化することにより、近代の産業資本を支える個人の倫理(エートス)を浮かび上がらせた、社会学の古典中の古典である。しかし、われわれはそこに描き出された親和

力や倫理の在り方(それ自体きわめて19世紀的なものである)がこれほどまでに人々を魅了してきたのはなぜか、それを読む者を捉えて離さなかったのはなぜか、と問うこともできる。それはひょっとすると、この作品が実態の記述とはさしあたり無関係なある種の文学性を秘めていることによるのかもしれない。

制度の生成4



性愛のかたち
家族のかたち 2

規範の内容に規範との関係に従っている。規が規範との関係含むとすれば、にすでに社会性している。そこで従うこと)は無うかもしれない関係(に従っている限り、#

制度の生成5



社会システムは(システム)行為の自な関与の形式本書はこの自で数学的な表ンサー・ブ提しつつ、称される社会を帰結する基過程を表現し目指している

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』
1996.2.10発行 pp.177 朝日新聞 おまけ

橋爪大三郎
『性愛論』
岩波書店・1995年



性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度に複雑な愛のかたちを持つ。本書は、この性愛をめぐる謎に社会科学的方法で迫ろうとする試みである。ここでは「性愛の分離公理」(=性愛領域が他の社会領域から隔てられていること)を軸に、猥褻が現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの帰結であること、性別はイデ

オロギーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感心に引き寄せられた人々」におすすめの一冊。

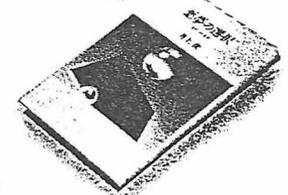
177

制度の生成1

ニクラス・ルーマン

『法社会学』(ウルキー)とも呼ばれるものを鮮やかに浮かび上がらせる方法となっている。第一章では既存の盛り場研究の系譜が概観され、第二章では明治の

文化の装置13



井上俊
『悪夢の選択』
筑摩書房・1992年

コンラッドの小説「闇の奥」のもつ文明論的含意とは何か。それは人生が「悪夢の選択」の連続である、ということだ。私たちはいくつかの選択可能な「悪夢」のうちからいくらかでもましなものを選んでその中で生きるほかはない。それは西欧近代文明というものが一つの「悪夢」として選択されていることからくる必然

であり、文明そのものを告げるものでもある。本書は「文化とコミュニケーション」を軸に、文化論・コミュニケーションの三部から構成された様々な対象や方法を駆使した中で「社会学主義を立場の模索を試み、興味深い一冊。

分析でなければならぬ。

フーコーの議論は説得的だが、同時に疑問も湧いてくる。まず、あらゆる言説が権力によって編成されるのなら、フーコー自身の言説も権力の作用を受けていることになる。その事実、フーコーの権力分析の正しさに影響しないのか？ さらに、彼のいう権力について、フーコーは明確な定義を与えていない。それはどのような概念なのか？(橋爪、一九八五b→一九八六)

こうした疑問に答えるまえに、いったん古典的な権力の概念にさかのぼって、権力の謎について最初から振り返っておこう。

一 謎としての権力

権力の定義としてもっとも標準的なのは、M・ヴェーバーの定義である。ヴェーバーは権力を、「ある社会的関係の内部で抵抗を排してまでも自己の意志貫徹するすべての可能性」と定義した(Weber, 1922=一九七二、八六頁)。この有名な定義は、わかりやすく言えば、いつでも相手に無理やり言うことを聞かすことができるのが、権力だとのべている。この定義は、権力をふるう人間の側からのものだが、われわれ近代人の常識と合致している。

これに対して、権力を服従者の視点から定義する試みもある。宮台真司の権力の予期理論(宮台、一九八九)は、その典型である。本当ならやりたくないことをやらされてしまうのが、権力であるとされる。

これ以外の論者たちの権力の定義も参考にして、そこから共通項を取り出すと、われわれは権力をつぎの

ように理解していることがわかる。

- ① 複数の選択肢(行為の可能性)……(服従者には)少なくとも二つの、行為の選択肢が与えられている。ひとつしか行為の可能性がなければ、そこには権力のはたらく余地がない。
- ② 自由意思……服従者は、自由意思(ほかからは説明されない自己原因)をそなえていて、(いやいやではあっても)自発的に権力に服従する。権力への服従は、自由意思による選択の結果である。自由意思のないところに、権力はない。
- ③ 選好……服従者は、自分の選好をもっていて、ある選択肢に比べて別の選択肢を好ましい(または、いやだ)と思う。どんな選択肢も無差別(どれでも同じ)であれば、そこに権力がはたらいたとは言えない。

④ 反実仮想……現実はこちらだけれど、ああでもありえたりははずだと、もうひとつの現実と比較すること。服従者が想像力をはたらかせなければ、権力は成り立たない。

これら①～④の要因が組み合わさって、権力現象が成立する。①～④の要因は、互いにからまりあっているが、どのひとつが欠けても、権力だとは言にくくなる。

権力をこのように理解した場合、問題の核心はつぎの点である——そもそもなぜ、ひと(服従者)はよりよいと思うほうの選択肢を選択できなかったのか？ それは彼の自由であるのに？ ここで、もうひとつの選択肢を選択するように強いている作用こそが、権力にはかならないのだ。

*

権力と自由(個人の自由意思)とは、互いに相補的な概念である。自由が発見されればされるほど、権力も

見いだされていく。権力は、自由を妨げ、自由を抑圧することによって自らの存在を示していくのだから。まったくの決定論(機械的なモデル)に、権力の余地はない(↑②)。

近代社会は、人間が自由な権利の主体であると想定する。そうした人びとが、自発的にとり交わす契約によって、社会が形成されていると考える。社会契約説は、そうした議論の典型である。

これは、近代社会が、市場(market)を拡大させながら発展してきたことと関係がある。市場は、自由意思のみにもとづいて任意の相手と関係を樹立する(または、しない)システムであり、そこでは契約がすべてである。契約は、双方の合意にもとづくから、そこに権力はありえない。なぜなら誰もが、自分の利害に照らして最善の選択をしているはずであり、誰も「嫌々ながら本当はやりたくないことをやって」いないからである。

この発想をおし進め、個人主義的なモデルによって社会を説明しようとする、権力は不可能であるように見えてくる。すなわち、人びとは自由意思をもっている。自由である限り、誰もが自分にとって最もものましい行動をとっているはずだ。とすれば、市場のケースと同じことが言えて、どんな社会関係も権力と解積できる余地はないことになる(このことの数式を用いた証明としては、志田、一九八七を参照)。

自由のあるところに権力はない。とすれば、権力は、人びとの自由にならない社会の前提のなかに、宿ることになる。たとえば、選択肢のなかの一つを自由に選べるとしても、選択肢の集合はどのように与えられたのか? (ルークスは、選択肢を隠蔽する権力のはたらきに、注意を喚起している。) 契約を自由に結べるとしても、契約を結ぶための条件(双方の初期手持ち量にあたるものは、どのように与えられたのか?)

個人主義的なアプローチ(権力の予期理論も含めてよい)によって、権力について説明しようとしても、こ

こが限界である。このアプローチには、つぎの制約がある。まず、権力現象を、たかだか二者関係のなかでだけ特徴づけようとしたこと。権力は、もっと広い範囲の人びとが関係する集合的な現象であると思われる。第二に、個人(主体)、自由、選択を实体視するところから出発して、それを疑わないこと。むしろそうした概念をうみ出すのが、権力ではないだろうか。

そこでわれわれは、了解(understanding)というはたらきに注目する。それは、権力が作動するのに必要な、反実仮想と結びついている。

二 了解の円環

反実仮想(counterfactual)は、ある行為者を取りまく状況(彼のいま・ここに不在の人びとや行為)を、彼の行為に関係づける営み(≠了解)の、ひとつの作用と考えられる。いま・ここに不在の人びとや行為は、ごく単純に考えて、いま・ここにいる行為者の行為に、因果的な影響を与えることができる。それは、了解(すなわち、行為者の精神のはたらき)を通じて、彼に影響を与えることができるだけである。

了解は一般に、社会を社会として成立させ、人びとに行為の前提を提供する。了解をどのようなはたらきとみるべきなのか、私の考えをまとめておこう。

*

了解(精神のはたらき)は、世界を構成する。世界のなかには、自分(自己像)や自分以外の人びと(他者像)が含まれている。構成された世界はいわば、自分の頭のなかにあるわけだが、そのことはあまり意識されず、

付かれても、それはただちに修正されてしまい、喰い違いとして意識されないということである。私はAさんから、思いもよらなかった事実を知らされた。その瞬間に、その事実(かつては私に外在した)は私の世界のなかに繰り込まれてしまう。そして、私の了解は、はじめから相手とひとつのリアリティに着床していたと同様の効果を持続する。

もうひとつは、修正のプロセスはどこまで続けても終わらないと考えられているのに、実際には数ステップで打ち切られてしまうことである。私と、Aさん。私の知っているAさんと、Aさんの知っている私。私の知っているAさんの知っている私と、Aさんの知っている私の知っているAさん。……。このプロセスは、すぐに打ち切られるが、あたかも先ほどの図のように、それが最後までたどられたところと区別がつかないのである。

*

このようにして、人びとの了解は、互いを繰り込みつつ、安定した状態(一種の均衡)を保っている。実際に人びとの了解している内容(めいめいが描いている世界)は異なるのだが、そのことは問題にならず、これ以上修正する必要のない予定調和の関係にあると信じられている。人びとのこのような了解の配置を、了解の円環(the circle of understandings)とよぶことにする。

了解の円環は、つぎのような特徴をもっている。

まず、了解の円環は、あらゆる人びとの了解によって構成されているので、誰かの了解が突然変動したからといって、それに脅かされない。その意味で、安定である。

第二に、了解の円環は、人びとが社会について知りうることの極大な内容を含む。了解の円環は、社会を

有意味なものとして成り立たせる、いわば背景(background)となっている。

第三に、私の了解と他者の了解は、どちらも了解の円環に内属していると想定されるので、内容が異なっても、同じ現実に対応するものとして接続される。了解の円環は、私の了解が人びとの了解へと接続されるための条件を与える。

三 集合的な効果としての、権力

以上を踏まえ、社会の骨格的な成り立ちを、つぎのようにおさえてみる(橋爪、一九九三)。

- (1) 人びとは身体として、存在する。社会は、身体の集合態(空間)である。
- (2) 身体は、了解のはたらきによって、世界を構成する。世界は、自己の身体像、他者の身体像を含む。
- (3) 身体が互いに直接に関係しあう作用が、性である。性は身体の近傍で作用する。
- (4) 身体から身体に波及する、形式的で不変な作用が言語である。言語は、空間を直進して、遠隔に到達する。
- (5) 身体が、他の身体とともにあることで集合的な効果のもとに置かれる現象が、権力である。権力は、性ならびに言語によって関係しあう諸身体を前提にしつつも、それらから独立な作用として、身体をとらえる。

*

最後の(5)にいう「集合的な効果」について、補足しよう。

私や他者の身体は、性ならびに言語によって関係しあっている。そうした諸身体の相互関係を、私が私の世界のなかの像として再構成することが、了解であった。ところで私の身体は、他のさまざまな身体と共にあることを逃れられない。そもそも私は「生まれた」(他の身体から由来した)のだった。ある身体と交渉がなくなる(たとえば相手が死ぬ)こと、ある一群の身体から脱する(たとえば他の部族に嫁ぐ)ことはありえても、この社会にある身体の総体から逃れることはできない。

こうした身体の集合性は、了解の円環のかたちで各人をとらえる。

権力は、ある身体内部の作用でない(身体に、その外から及ぶ作用である)。いっぽう私の行為は、私によって(身体内部で)コントロールされている。権力が私に及ぶ場合、それは、つぎのような変換を必要とする。すなわち「身体の集合性↓(私の)身体」を、「了解の円環↓(私の)了解」に置き換えるという変換である。この変換によって、権力の効果は、私の身体のうえに対応する作用をもち、実効的なものになる。

なおここで、了解の円環と(私における)その像とは、区別されない。なぜなら、了解の円環のなかでは、私の了解と他者の了解とは融けあって区別がつかないからだ。私は、私の必ずしもよく知らない多くの人びと(身体)とともに生きている。了解の円環は、私がそれを信じるために必要な、ひとつの地平なのである。

四 権力は、どのように身体をとらえるか

権力はなぜ、逃れがたく、すべての人びとをとらえるのか。

権力の拘束性の実質は、この社会空間からひととは逃れられないこと、その事実にある。ただしそのことは、

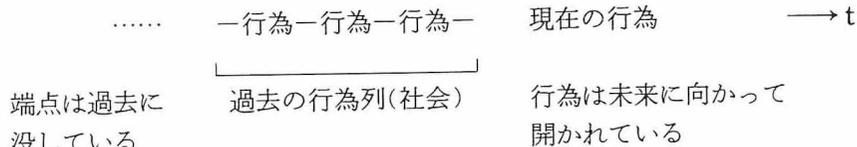


図2

了解を通じて、知識として人びとをとらえるしかない。すなわち、権力の本質とは、知識なのである。

*

権力の作用を、了解の円環との関係からもう少し説明してみよう。

私がいま、ある行為をしようとしている。この行為は、私の行為だから、その限りで私の自由になるはずである。だが同時に、それが行為として効力をもつ(妥当する)ためには、さまざまなそれ以前に行なわれた行為と接続しなければならない。たとえば、それがあるものを買う行為であれば、それ以前に、誰かがそのものを売り出していなければならず、また、誰かが貨幣を提供していなければならぬ、等々。こうした接続の全体は、私の恣意にならない。

私の行為は、これまでに行なわれたさまざまな行為、これまでに行為を行なったさまざまな人びとの存在を前提とする。(私の行為が前提とする行為が、さらにほかの行為を前提とし、以下同様であるため、この関係はおそらくたちまち空間の全体に及んでいく。)行為は一般に、不在となった行為列(過去の社会)を前提として、可能となる。過去↓現在に向かう一方向的な関係(前提となる過去の行為が、現在の行為を規定する関係)は、権力の不可抗性のもうひとつの要因である。

言語は、身体の間を波及する不変の(≡意味を変化させない)作用だった。そのため、不在の他者たち(死者を含む)の言説や、彼らのかたちづくった社会関係、行為の妥当性

(過去の社会の様式)を保存することができる。いっぽう性は、身体と身体との間の直接的な作用だった。けれども、性は間接的な関係に転化しうる(たとえば、AがBの親であり、BがCの親である場合、そこからAとCの間接的な関係が派生する)。そこで、ある身体が存在させている性の(間接的な)関係は、どこまでも過去にさかのぼることができる。結局のところ、私がこれから行なおうとする行為は、過去の行為列(過去の社会)に一方的に規定されている。この行為列はいつ始まったもしれず、端点は過去に没している。いっぽう、これからの行為のほうは、未来に向かって開かれている。行為は、互いに組みあわさって秩序あるまとまりをかたちづくっているが、それを数学の「集合set」のようなものとみなすことは適当でない。なぜなら、その境界を確定することはむずかしいからだ。

*

過去の行為は互いに必ずしも分離されず、ひとつの地平を構成する。

過去の行為のあるものは、誰がいつどのようにふるまったかはっきりしていて、現に行なわれようとする行為の明確な前提となる。しかし、そうした行為の背後にもまださまざまな行為があり、それらははっきり分解できない。堆積した地層のように積み重なった過去の行為の集積効果が、行為の現在を規定し、行為の展開する場を形成する。

いま生きて行為する人びとは、身体として、この地平のうえにさまざまな位置を占めている。どの身体も、全体を見渡す位置にはないかもしれないが、そこに多くの身体が存在し、緊密な関係を保っていることを知っている。

このような身体の集合性を包み込むのが、了解の円環である。了解の円環は、さまざまな身体が互いにど

のように関係し制約しあっているかについて、ひとが依拠しうる最終的な知識である。直接に拘束しあっているわけではない身体同士が、間接的に制約しあう。このことが知識として知られてはじめて、その制約は現実的な拘束に転化する。

社会空間のなかから適当にふたつの身体を取り出すならば、そこには、なんらかの制約しあう関係の径路がみつかるだろう。身体は、この空間に内属するかぎり、すべての身体とそのような径路で結ばれることが避けがたい。空間にそなわる身体間のこうした制約の総体が、もっとも根底的な意味での権力である。こうした身体と身体との制約関係は、そのときどきにおいて切りわけられ、明示的な権力関係となったり、ならなかったりする。

五 権力の妥当域

身体間の制約関係(もっとも根底的な意味での権力)は、どのように社会空間を満たしているであろうか。権力はそもそも、了解の円環を経由した、空間全域にわたる作用であるので、局所的な現象や体験に解消できない。

これまで人びとは、権力者と服従者とのあいだの権力関係を多く論じてきた。それを、権力の構成要素(それを解明できれば、その複合として権力を記述できるもの)と信じたからである。しかし、二者間の権力関係は、その権力関係を妥当させる社会的文脈と輻輳した場合に、はじめてそうしたものとして成立するにすぎない。そこでここでは、権力がどのように妥当するかという問題を論じておこう。

権力が妥当するとは、ある場面で効力をもった権力関係が、それ以外の場所でもくつがえされることなく権力として有効であり続けることである。権力関係が有効なものとして通用する場所を、権力の妥当域ということにする。(権力が妥当するという現象は、ハートが論じた法的ルールの承認と似ている。)

権力が妥当であることは、権力関係のなかで働く予期と、円環している(ニワトリとタマゴの関係である)。権力関係にある当事者は、人びとがそれを妥当なものを受け入れるだろうと予期するので、権力関係を成り立たせている。いっぽう人びとは、権力関係が成り立っているので、それを妥当なものともみなす。

権力を妥当させているのは、めいめいの了解である。ある関係は権力関係であると認識し、しかもその関係の効力を承認する。それがこの場合の、了解のなかみである。めいめいの了解は喰い違っているから、こうした承認がうまくあいに連鎖していくという保証はない。逆にいうと、権力関係が拘束力をもって当事者をとらえるのは、そこで成立した権力が自分の周囲に妥当していくだろうと予想できる場合である。権力関係の当事者は、かならずこうした領域(権力の妥当域)を、自分のまわりにもっている。

*

権力関係の両当事者は一般に、互いの背後にある権力の妥当域を、具体的に見通すことができない。

たとえば、王の代官Aが、農民Bから税を取り立てるところを考えよう(王、代官などといった名前は、あとで論じる権力のゲーム、権力の制度のなかで、はじめて意味をもつ概念だが、ここではイメージが湧きやすいので便宜的に用いている)。

代官Aが農民Bから税を取り立てている。Aが税を要求し、Bがそれを払えば、この関係は権力関係とし

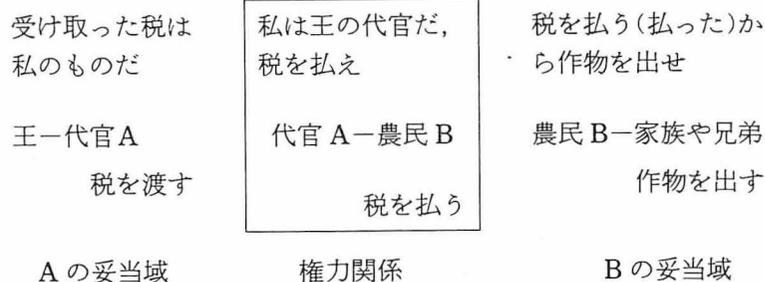


図3

て成立した、と言えよう。代官Aが税を取り立てるのは、その背後に、彼を代官として派遣した別の存在(王)がいるからだ。王は、Aが取り立てたのは自分の税だと考えて、それを引き渡すように求めるだろう。いっぽう、農民Bの背後には、いっしょに畑で仕事をした家族や、兄弟たちがいるかもしれない。そして、自分が税を払うのだからと、その分を彼らの取り分から集めて回るかもしれない。こうした関係の網は、さらにその外側に拡がっていく。

双方が背景にしているこうした権力の妥当域は、その全体の構造において、権力の妥当条件をつくり出す、と考えられる。権力関係が、権力者/服従者といった非対称な関係となるのは、双方が背景にしている妥当域の構造の違いに対応している。

六 線的な作用としての権力

権力の妥当とならんで、線的な作用(linear operation)として現象することも、権力の重要な特徴であると考えられる。

権力は、空間(身体の集合)に人びとが内属するところからもたらされる相互制約に由来する、とのべた。身体間の相互制約の、あるものは直接的であり、あるものは間接的である。間接的な制約は、知識としてもたらされる。人びと

は、各人が知識をもっていることを知っており、各人が知識をもっていることを知っており、……。権力は、こうした知識の高階な集合性(了解の円環)のうえで機能する。

*

権力は、身体の直接的な制約(たとえば、暴力や性)を必ず超えて出ている。(直接的な制約でしかないものは、物理的な制約や性的な体験として解釈されることになる。)にもかかわらず、その圧力の総体(直接的な制約+間接的な制約)は、ある状況である他者の身体と直面する場合に、体験される。そこでその圧力は、直面する他者の身体の後(権力の妥当域)から、自分の身体をめぐってやってくるように受けとめられる。すなわち権力は、ある権力の妥当域から、それを背景とする身体を通して、もうひとつの身体(権力に捉えられる私)を突き抜け、私の背景となる権力の妥当域へと伸びてゆく、線的な作用である。根底的な意味での権力は、あらゆる身体を互いにつなぎとめる制約の多方向な網の目であるが、それが具体的な身体を捉える場面では、必ずある方向をもって体験されるのだ。権力には方向がある。

権力が、いっぽうの身体からもういっぽうの身体へ線的な作用を及ぼしているとき、人びとはそこに権力の線分(権力線)を認めることになる。

さまざまな方向からあらゆる身体へ、権力線が走っている。そして人びとは幾重にも、その権力線に対応する権力の妥当域に蔽われている。権力の妥当域の集積としての社会空間の様相を、権力空間とよぶことができる。

*

権力を体験すると、ひとは、権力の線分(権力線)をその上流にたどろうとする。たとえば、さきほどの農

民Bは、代官Aの背後に権力線を想定し、王↓代官Aというもうひとつの権力関係を発見するかもしれない。ただし権力線は、そこで行き止まりではなく、王の背後にある権力の妥当域のなかへとさらに伸びているだろう。

権力線は、どこまで伸びていくか？

それが湾曲して、もとに戻ってくることも、ありえないことではない。婚姻交換における女性の与え手/受け手のあいだを、権力的な上下関係とみなしている社会がある。その場合、権力線は、婚姻交換のループをたどって、もとの場所に戻ってくることになる。

しかしこれは、やはり稀なケースであろう。多くの場合、人びとは権力線を、上流へ、権力の源泉へたどることができるかと考える。そして、権力線の端点を、端的に想定する。神、あるいは国家主権といった観念は、人びとのこうした想定の帰結である。人びとは、了解の円環のなかにこうした架空の身体(特異点)を追加する。そして、空間全体の権力線が安定してそこから流出すると解釈するのである。

人びとは権力を、しばしば、命令関係に照らして解釈(モデル化)する。

命令は、言語のなかのひとつの様相であり、あくまでも意味的な作用である。しかし人びとは、命令モデルによって権力空間を解釈し、たとえば神を、絶対的で権力的な命令の究極の発話主体と考える。この解釈は、人びとを納得させる場合があるが、しかし経験的でも正確でもない。権力は、言語と関わりなく、関係のなかで自らを再生産しうる。

*

設定された権力空間のなかで、権力線の(上流の)端点であると認知される点を、権威(authority)という。

人びとは、権威がまず実在し、しかるのちに権力が存在すると信じる。しかしこれは、正しくない。あらゆる社会関係は、いくばくかの割合で権力関係の要素を含む、権力の前駆形態である。そこから一定の手続きによって、権力が編成され、可視的となるのだ。

七 権力ゲーム

権力を意図的に行使する場合、ひとは、権力のメタ知識を必要とする。

権力それ自体が、知識であった。その権力を、ひとつの対象とみて、行使する。これは知識に関する知識であるから、メタ知識とよぶべきであろう。それでは、権力はどのように行使されるのか。

*

社会は言語ゲームの渦巻きである、とのべた(橋爪、一九八五a)。人びとの行為は規則に従っており、言語ゲームとして展開していると考えられる。

権力が存在するという前提にもとづく人びとのふるまいを、権力ゲームとよぶ。権力ゲームは、言語ゲームの一種(すなわち、社会の部分空間)である。一般に言語ゲームのなかで、その前提が実在しはじめる。したがって、権力ゲームのなかで、権力資源や権力手段が実在しはじめる。権力があるから、権力ゲームが可能になるのではない。権力ゲームがあるから、権力の社会的実在が確認されるのである。(実在を確認されなくてもよい権力線は、権力ゲームの内部にも外部にも走っている。)

言語ゲームは根拠がない。ここから、つぎのことが導かれる——ある権力ゲームの成立を、そのゲームの

内部の権力によって保証することはできない。逆に言えば、ある権力ゲームの内部に、その権力を解除・失効させるような積極的な契機は見つからない。

このことから、権力ゲームは、①ほかの権力ゲームによって、②ほかの、権力ゲームに類似するゲーム(たとえば、宗教)によって、③ほかの、権力を解除することを主題とするゲーム(たとえば、民主主義)によって、挑戦され、破壊され、相対化されるだけである、と言えるであろう。

*

特定の権力ゲームが、社会空間の全域をおおい、権力空間に完全な表現を与えるとき、それは権力の制度となる。

法のシステムは、権力の制度の一形態であると言えよう。それは、社会空間の全域をおおう権力ゲームの一種だからだ。法的責務をめぐるゲームは、しかるべき身体にいかにか権力線を照準するかは技術論である。そして法のシステムは、責務をめぐるゲームを一次ゲームとする、二次ゲームの複合(すなわち、高階の権力ゲーム)であった。

八 脱権力ゲームとしての民主主義

権力ゲームが転態したものが、民主主義のゲームである。

近代民主主義は、権力に対する独特の態度をもっている。それは、合意↓権力を樹立することの宣言↓権限を付与することの宣言↓……と続くプロセスを特徴とする。あらゆる強制の前提に、人びとの合意を想定

しなければ気がすまないのが民主主義である。

民主主義は、権力ゲームの裏返しである。このゲームのなかにいると、権力が見えなくなる。そのかわりに、人びとの意思と合意(だけ)が見えてくる。権力や権限を行使する場合、そこには人びとの合意が先行していなければならない。だからそこには、権力はなく合意がある。この想定がパラドックスを導くことは、最初の「謎としての権力」のところでのべておいた。

*

民主主義のゲームの場合にも、すべての社会がそうであるように、身体をとらえる権力線が交錯している。私は不可抗の力に、縛られている。しかしこのゲームのなかで、私は権力線の上流に、他者の意思をみない。他者も法(ルール)に従ってふるまっており、そのルールの根底には私たちの合意があった。実際問題としてそんな合意をした覚えがなくても、そう解釈するのである。権力は、自分の意思が自分を縛る現象に置き換えられてしまう。

民主主義の前提を、復習してみよう。①人びとは自由意思をもち、自己決定する権利の主体である。②各人の行為が拘束されるとすれば、それは事前の合意にもとづく。③社会の制度的な骨格はのこらず、明示的な法(実定法)によって規定されなければならない。④実定法の体系は、円環する。ここで、人びとが空間に内属するほかない拘束性は、実定法の円環に置き換わっている。一つひとつの法を、自分の意思が自分を拘束するストーリーとして解釈するならば、それは円環せざるをえない。

こうして、民主主義は、了解の円環を、合意の円環(意思の究極的な整合性)に置き換えようとする。しかし、民主主義もまた、権力ゲームと同様、権力についてのメタ知識を行使しているのである。そして、この

メタ知識(権力が不在であるという知識)は、そのゲームに内属しない人びとに対して真理を主張することができない。

*

それでは、民主主義ゲームのどこに権力が存在しているのか。

いまの流行りは、"権力を見えなくしている力、そこに権力が作用している"といった言い方である。間違っている、いないかもしれない。だが私は、そう言わないことにする。そう言うてすませるだけでは、権力の本質論を欠いたまま議論を円環させることになり、その先に発展がない。

権力は、知識である。身体の配列と作動メカニズムに関する、知識である。身体の配列に関しては性が、作動メカニズムに関しては言語が、知識の前提となる。しかし権力は、それらに還元されない。なぜならば、権力は、知識が現実性をもち、権力を作動させ、それがまた知識となり、……という自己形成的な運動でもあるからだ。循環する民主主義のゲームもまた、そうした運動のひとつとして記述できる。

権力を可能にする根拠——それは、権力の概念のなかに潜んでいる。ひとは、権力を知っている。想像力はひとを自由にするが、その反作用として、身体が不自由であることを発見させる。人びとは、想像力のみで、不自由のありかに解釈を加える。それが知識となって、空間のなかで現実化するとき、権力は生成する。

このプロセスは、人間にとって必然的である。したがって、権力を、空間に属する独立な作用にかぞえるべきなのである。

【文献】

志田基与師、一九八七「個人主義的権力理論の可能性」『ソシオロゴス』11・八六頁―九五頁。
 橋爪大三郎、一九八五a「言語ゲームと社会理論」勁草書房
 橋爪大三郎、一九八五b「フーコーの微分幾何学」『ソシオロゴス』9・一九八六『仏教の言説戦略』三八頁―六一頁、勁草書房
 橋爪大三郎、一九八八「ダブル・リアリティ」『ソシオロゴス』12・一九九三・一頁―二九頁
 橋爪大三郎、一九九三『橋爪大三郎コレクション・身体論』勁草書房
 宮台 真司、一九八九『権力の予期理論——予期を媒介とする作動形式——』勁草書房
 Foucault, Michel, 1965, *L'archéologie de savoir*. (一九八一、中村雄二郎訳『知の考古学』新潮社)
 Foucault, Michel, 1976, *La volonté de savoir*. (一九八六、渡辺守章訳『知への意志』新潮社)
 Lukes, Steven, 1974, *Power: A Radical View*, Macmillan. (一九九五、中島吉弘訳『現代権力論批判』未来社)
 Weber, Max, 1922, *Wirtschaft und Gesellschaft*. (一九七二、清水幾太郎抄訳『社会学の根本概念』岩波文庫)
 Wittgenstein, Ludwig, 1921, *Philosophische Untersuchungen*. (一九七六、藤本隆志訳『哲学探究』ワイトゲンシュタイン全集8)大修館書店)

* "How Is Power Possible?" by Daisaburo HASHIZUME, March 1996

日本中を揺るがせたオウム真理教事件をめぐり、活発な論議が繰り広げられている。地下鉄サリン事件から教団幹部の逮捕にいたる時期、風俗的な話題が世の関心を呼んだ。その狂騒が冷めた後、現代日本の精神状況を解説する知的な格闘が静かに始まっている。

「オウムが、あるいはオウムのなものが、私自身もそういふ可能性があるを示している」という自覚なしには、このよめなものを書くことはなかったであろう。一九五八年生まれの社会学者、大沢真幸氏は近刊の『虚構の時代の果て』(ちくま新書)にこう記した。

オウムが抱いていたハルマゲドン思想のくだらなさを嘲笑(ちやうしやう)するのはたやすい。だが、その「くだらなさ」が特殊でない多くの人の行動を支配してしまっただけに過ぎないか、社会的な分析に大切な意味が出てくる。



これまで指摘されている通り、大沢氏もオウムの思

「オウム」生む社会を解説

戦後日本の精神構造と連関

想を終末イメージに彩られた七、八〇年代サブカルチャーのパロディと見る。例えば、教団施設にあった空気清浄器と人気アニメ「宇宙戦艦ヤマト」に出てくる放射能除去装置の名前が同じ「コスモクリーナー」だったといった点を確認する。過去の新興宗教では、貧困や病気が入信を促すことが多かったのに対し、オウムの場合は不幸が何もないという空虚さが入信動機となっていた。サブカルチャーのパロディや空虚さの克服が現実の全否定へと暴走していったのはなぜなのか。

それ自体はむき出しのロジックだが、そこに冷戦の崩壊や自殺本の流行に見るエイジの流れに合流していった。日本の戦後五十年はこの「自分探し」が露出する過程だったという。内向から「自分探し」が始まり、「自分が変われば世界が変わる」というニューエイジの流れに合流していった。日本の戦後五十年はこの「自分探し」が露出する過程だったという。

大沢氏は「近代」のルーツを古代ユダヤ教の「神象」の解説(筑摩書房)の中で同氏はオウム真理教は突然変異ではなく、ニューエイジのムーブメントに位置付けられると書く。ニューエイジとは、新霊性運動ともいわれ、一九七〇年ごろから同時に先進国の都市で展開している運動。大沢氏はこんなふうに分析する。若者の優しさは「心配をかける」という形で働きかけをやめる「ように変容し、やがて人間関係の不全をもたらした。その

風社刊『オウムと近代国家』。子供は親から「自由にしろ」という指示と「これをしてはいけない」という禁止を同時に示されると精神的に分裂する。専門用語でいうダブルバインド状況がアメリカと日本の間にあり、オウムもまた、この戦後の精神構造の中にあり、橋爪氏は指摘する。教団が極端な反米主義だったことは記憶に新しい。

先日行われた「宗教と社会」学会では、オウムを生んだ神秘主義などの潮流が事件の後、衰退することなく、拡大していると報告された。若者たちの「身体や意識を束縛と感ずる感受性」(大沢氏)、それを乗り越えるための超能力への関心は、むしろ進行しているかに見える。オウムのものをいかにして超えるか。大沢氏は社会的な考察、格闘の果てに「他者に対する徹底した寛容」という言葉をしばりだしている。文化部 内田洋一

